食文化の研究
―茶の伝来と博多の茶人についての一考察―

松　隈　美　紀

Research of gastronomic culture
― Transmission of tea and consideration of tea masters ceremony in Hakata ―

Miki Matsuguma　（2007年11月29日受理）

1. 緒 言

茶は古い時代から人類の生活と結びついて利用され，それは単に嗜好性飲料としてのみではなく，食用，薬用，あるいは副食的利用などと幅広く生活体系に折り込まれてきた[1]。

現在日本茶の産地は，南は鹿児島から北は新潟まで各地に点在しており，産地により茶葉の種類や製法，味わいもさまざまである。

日本における喫茶の風習は栄西が南宋より九州(博多)に茶種を持ち帰って以来，約800年の時代を経た今も日本人の食生活に密着している。

近年，このように古くから日本において，伝統的に飲用されている緑茶に，生活習慣病予防に有効な成分が多く含まれていることが報告されている。

例えば，茶葉に含まれている成分の生理機能として抗酸化作用，抗ガン作用，血中コレステロール低下作用，カフェインの覚醒作用，利尿作用，抗菌作用，抗炎症作用，血圧低下作用，好中球活性化作用，抗アレルギー効果等，多くの研究成果が報告されている[2,3,4]。

そこで本研究は，日本の文化伝統の中で博多の茶の歴史的背景と文化(食文化)的結びつきについて，食育の一環である食指導のあり方を見出す目的で，文献検索や現地調査による検討と考察を行った。

1. 茶の伝来

茶の伝来は，「茶の伝来と博多における茶についての一考察」に前述したように，茶樹の発祥の地中国の四川より起こったと言われている。また，中国古代伝説の神(神農)による茶の効能が説かれ，シルクロードによる仏教伝来と共に，茶は仏事の日常雑事に関わる。さらに，仏教は茶文化と共に二世紀頃から中国東部，南部へと広がり，幾多の遣隋使，遣唐使により茶の製品と飲茶法が我が国に伝わった。しかし，日本に飲茶の風習を定着させたのは平安時代末期，中国より茶の種子を持ち帰った栄西禅師である。また，栄西禅師により我が国に将来された抹茶法こそ，茶が我が国において本格的な生活文化の歴史を展開する起点となった。

2. 博多の茶人

博多は，交通や交易の要衝に自発的に発生した商業都市，港湾都市で，室町末期の戦国時代以降急激に発展した城下町ともまた違って，もともと公家，僧侶，武士などとは関係の薄い，いわゆる商工業を主体とする都市であり，町人の都市であった。支配者各自が闘争をこととする乱世紀において，このような性格をもつ町々が自己防衛の必要から，おのずと自治的な動きをみせた。その代表的都市が，摂津の平野，和泉の堺であり，同様に筑前の博多もこのような都市であった。堺や博多の町人は江戸時代の大阪や江戸の町人とはまったく違い，その時代の武士と同様に自由と気概をもっていた。従って，文化を享受する積極性においても大名や土豪(どごう)と比肩(ひけん)できたのである。茶道文化に対してはもちろんであり，「山上宗ニ記」に「其比(そのひ)，茶湯セザルモノ，人非人ト等シ。諸大名ハ不レ及レ云，下々，殊ニ南都・京・境町人ニ至迄，茶湯専一トス。其中，上手，并名物所持之者，京境ノ町人達モ大和大名煮等シク御下知ヲ下サレ，御茶湯ノ座ニ召出サレ，御雑談ノ人数ニ被二召加一。依レ之，町人等，猶，御名物ヲ所持ス」と記されているとおりであった。たとえば，堺の富商者達が数奇者(すきしゃ)であり，毎年毎月のように茶会が催されていたことは，「津田宗及茶湯日記」・

別刷請求先：松隈美紀，中村学園大学短期大学部食物栄養学科，〒814-0198 福岡市城南区別府5－7－1
E-mail : miki362@nakamura-u.ac.jp

「今井宗久茶湯書抜」・「松屋会記」などによって充分に知ることができる。又博多の場合も，「宗湛日記」などによってその実状を窺うことができる。そして，この博多の町の数奇者の代表としては島井宗室 (1539~1615 年)，「宗湛日記」の筆者，神屋宗湛 (1551~1635 年) の二人をあげることができる。

博多が都市として発展した原因については，いくつかの条件が考えられるが，大別すると地理的条件と歴史的条件があげられる。地理的に博多は，朝鮮—対馬—博多—薩摩—琉球を結ぶライン，中国—五島—博多—赤間関—兵庫—畿内市場を結ぶラインの交叉点としての重要な地位に位置している。これが歴史的には，大宰の外港となり，元寇では外敵の攻撃目標となり，室町時代には勘合貿易の発着地となり，又，倭寇の経由地ともなった。経済的主要地点であるために，いち早く都市としての形態を整え，そこに商人＝都市民の成長をみたのである。また，こうしたことが，経済的拠点としての博多を重視する守護大名の相互間で，争奪の対象となったのである。勘合貿易の実権が，室町幕府の手を離れて大内氏に握られていた時代には，神屋宗湛の祖先の神屋寿禎が大内義興の時に明から銀銅の吹分け法を伝えて，大内領国内の石見銀山の開発に当たったということも，大内氏と博多の商人の緊密な連繋を物語っている。しかし，1551 年 (天文 20 年) に大内氏が滅亡すると，豊後の大友氏の勢力が強く博多の町を支配するようになってきた。後年，ルイス＝フロイスは「日本史」の中で博多のことを「当時全シモ (九州) を通じて博多ほど富有な町はなかった。それは総て盛んなる泉州堺を訪ねて，全く商人を基礎として作られた国家組織であったから」としているが，堺が三十六人の会合衆合議によって支配されていたと同様，天正の頃には，博多にも有力商人の合議支配下におかれていた。しかし，博多の町も戦国時代には大内と大友また，大友と毛利との戦災にあった。幾度かの戦災にあったにもかかわらず，たくましく生き返り，焼け跡の町に復興の努力を重ねた。博多の数奇者と呼ばれた島井宗室，神屋宗湛は，このような町の環境から生まれた。

1)『島井宗室』

福岡市の島井家では現在のような「島井氏家系」と題した折本の系図を伝えている。

島井宗室は通称“徳太夫”，名を茂勝といった。剃髪して瑞翁宗室と号し，後に宗室と改めた。瑞雲庵・虚白軒の別号もある。島井の家系は藤原氏からでて，第五十一代修理亮茂教から六代目が島井宗室である。島井家は酒屋，または，金融業者として早くから知られていた。博多において大内氏が滅亡して，大友氏が領有を握った頃から，宗室は活躍を始めた。宗室はその富力をもって広く九州大名の財政機関に出入りし，堺商人との接触により，次第に茶を学んでいった。また，家業の関係から，唐物，高麗物，または南蛮物の茶器が手に入りやすかったので数奇大名たちが宗室の斡旋(あっせん)によって，それらの茶器を入手しようと一生懸命になったということである。大友宗麟(おおともそうりん) (1545~1596 年)，羽柴秀吉(はしばひでよし) (1536~1598 年)，筑前の秋月種実(あきづきたねざね) (1545~1596 年) が，そのような大名であった。

宗室に関する最も正確な史料である「島井文書」によって知られる宗室の歴史への最初の登場は，大友宗麟との関係の場である。このことは博多の宗室が九州の宗室となったことを意味する。大友氏と宗室の関係は，「島井文書」によれば，第一に博多津支配の為，大友氏が宗室を町政施行上の有力者と認めて関係を結んだ。第二に，商人としての宗室が，酒屋・土倉によって蓄積した富力を背景に，大友氏に対して多少御用商人的な立場から資金面で関係を有したらしい。第三に，数奇者としての宗室が，当時の社交上重要な意味をもった茶道を仲介として，一流文化人としての大友宗麟と風流の交わりをもった。というような記述内容が見られる。いずれも，青壮年時代の宗室が博多に住居し，博多の有力商人となり，富有となり，その支配者と関係したという，歴史的・社会的事情から帰結された彼の行動である。

しかし，宗室は大友氏との関係を通じて，さらに九州の宗室から日本の宗室に飛躍する機会をもつことになった。

大友宗麟の家老である吉弘鎮信が，宗室にあてた十月晦日付けの書状 (「島井文書」所収によると，「其元(そのもと)，口切時分の条，種々御遊会，察し申し候」とあり，宗室が，口切の茶事に忙殺(たいふう)されている様子がわかる。また，「其元は，大風以後取乱れ，茶湯たるみまいらせ候」とあり，大友家中で茶の湯が流行していたことも推測される。さらに，「今朝，道叱(どうしつ)へ宗室同前参候」つまり「けさ，宗室は道叱の時と同様に参上した」と書かれており，大友氏との関係を最も集約的に物語っている。なお，この書状で吉弘は，照布(しょうふ) (朝鮮から輸入していた上質の布)・北絹 (黄繭(きまゆ)からとった黄糸で製する絹，明からの主要輸入品であった)・綾紗(さや)・天目茶碗・対馬さうけ (さうけの意味は不明) 等を宗室に所望した。このことは，宗室がそうした珍品を調達し得る立場にあったことを示すとともに，そうした舶載品の需給という関係を通して両者が結びつけられていた事情をも窺わせる。もともと大友宗麟は外国貿易に並々ならぬ関心をしめした大名であった。次に翌年の九月十九

日付けの書状にも第二条・第三条・第六条・第七条・追書などは，茶巾，風炉，勢高肩衝，軸物，茶屋などいずれも茶道に関係のある文言で満たされているが，こうした関係を通して博多・豊後・堺の連繋が作り上げられていったといわれている。

天正初年に島井宗室が所持していた茶器の中で，最も有名なのは「楢柴肩衝」であった。楢柴肩衝は漢作茶入れで，元来足利将軍家に伝来したものであり，八代将軍義政 (1435~1490 年) の時東山御物に加えられたのを義政の茶の湯の師範となった珠光 (1423~1502 年) が，義政から下賜され，これを高弟の鳥居引拙に与えた。 引拙の死後，境の町の数奇者のあいだを転々として伝えられたが，それを津田宗柏の斡旋によって博多の神屋宗白が手に入れた。宗白は博多の富商神屋紹策の弟であり，「宗湛日記」の筆者神屋宗湛の叔父に当たる。島井宗室は津田宗柏の死後，楢柴肩衝を宗白の次男天王寺屋道叱の勧めによって神屋宗白から買い取ったということである。この茶入れの形状は「宗湛日記」によると，「ナラ柴肩衝ハ，口付ノ筋ニツ，腰サカツテ帯一，肩丸クナテ候。筋ノアタリニ茶色ノ薬アリ。土青メニ細ク，薬ハツレハ四―五分，底糸切也。ソノ切目ウシロノハタニカ＞ル。袋ハ白地ノ金ラン，紋テツセン花，カナ地，ヒシ也。裏香色ノ片色也。緒ツカリコイアサキ。」と記されている。要訳すると，「肩がなで肩で，腰が下がり，帯が一つある。口付きに筋二つ，筋のあたりに茶色の上薬がかかり，それが下にたれている。土は青めに，こまかく，薬はずれは四，五分で，底は糸切り，鉄線花の文のある白地金襴の袋に入っている。」楢柴という銘は『はし鷹の猟場の鈴のなら柴のなればまさらで恋ぞまされる』という作者未詳の古歌にちなんでつけられたものだといわれる。茶色の上薬が濃いので，「恋ぞまされる」の下の第五句にかけたのである。また，天正十六年の奥書がある山上宗二の「茶器名物集」は楢柴の肩衝について，宗二自身はこの壷を見ていないが千利休が雑談の折りによく話したところでは，形状は「壷ノナリ下フクラニ聞エ候。薬アメ色ニ一段コク候。薬ククミ候。薬コイト云フニナラシバト云心力」ということであったとし，「此壷数奇ノ方ニハ是ガ天下一 。」，「天下ニ三ツ之名物也。」とも記している。新田肩衛・初花肩衛とともに天下三名物と言われ，また，数奇道具としては，天下一かとまで評せられた。このような有名な茶入れであったから，豊後の大友宗麟は楢柴肩衛を懇望した。しかし宗室は相手にしなかった。ところが秋月種実が茶の道に志があったわけでもないが，大友氏への仇敵のために宗室に使者を送って楢柴の所望を申し出た。最初，宗室は相手にしていなかったが，結局は，手渡さずにはいられなくなってしまったという。

島井宗室は商用がてらしばしば上方にのぼり，堺の町におもむいた。そして，堺の数奇者，または茶の湯者の茶会に参席している。

1582 年 (天正 10 年) 正月 25 日，宗室は津田宗及と一緒に惟任日向守 (明智光秀) の朝会に招待されている。この朝会の様子は，「津田宗及茶湯日記」に詳しく書かれている。床には方盆に青木肩衛を飾り，風炉には信長から拝領したという平釜が掛っていた。宗室が手水を使っている間に，亭主の光秀は肩衛を水指しの所に移し床に「淡路島通ふ千鳥」の和歌である定家の色紙を掛けた。掛け物の下には硯を置いた。道庫棚から台無しの霜夜天目を取り出し，亭主の光秀が茶を点てる。水指しには大瓶の蓋を用いた。薄茶は深い高麗茶碗に点て，それから秘蔵の八重桜の大壷を持ち出し，宗室と宗及に拝見させている。これが明智光秀の最後の茶会であり，この茶会に島井宗室が招かれたのは，偶然ともいう因縁の深い廻り合わせだったように窺える。

福岡市博多区に東長寺がある。ここは弘法大師が帰朝後に建立した日本最初の真言寺として著名であるが，この寺の所蔵品で弘法大師の真筆といわれる「一切経千字文」については面白い逸話がある。この「千字文」は，博多の豪商である宗室が寄贈したものらしいが，宗室がこれを入手したいきさつが尋常ではないと言う。天正十年六月二日の早暁，京都で本能寺の変が勃発し，信長は光秀のために横死してしまった。その時に宗室は前夜から信長に招かれていたということである。「島井家由緒書」によると，宗室は天正十年初夏の頃神屋宗湛と同道して上方に上り，六月，信長公がお茶をくだされたというので，本能寺に出かけた。たまたま明智光秀の反乱が起こったので，急いで本能寺を引き上げたが，その時弘法大師の「千字文」の一軸を持ち帰ったということである。

図 1　東長寺　弘法大使の「一切経千字文」が納められている。

宗室が信長に接近してゆく方途が堺の商人を介して茶人として交渉をもってゆくという方法であったように，宗室と秀吉の交渉もまず茶湯を介してはじめられた。その仲介者は，千利休である。「宗湛日記」によると，1587年(天正十五年)の六月十四日，宗室は筑前の筥崎の燈籠殿で催された利休の茶会に，神屋宗湛，長谷川宗仁とともに参席した。宗湛が正客で，宗室と宗仁は相伴客であった。茶の手前は利休であった。この茶会の行われた燈籠殿は，『筥崎八幡縁起図』(社宝)によれば，社前の潮井道の西側にあったらしいが，明治三年筥崎宮裏の恵光院に移された。この堂は，1208年(承元二年)箱崎の海中から出現したと伝えられる石体の十一面観音菩薩を祀るために建立したものとされていて一名を慈眼院ともいい，筑前国西国四番札所である。恵光院にはこの他にも，秀吉と利休を形どった博多人形が納められている。なお，筥崎宮本殿脇にある石燈籠は，社伝によれば，この時利休が寄進したものといわれ，重要文化財とされている。

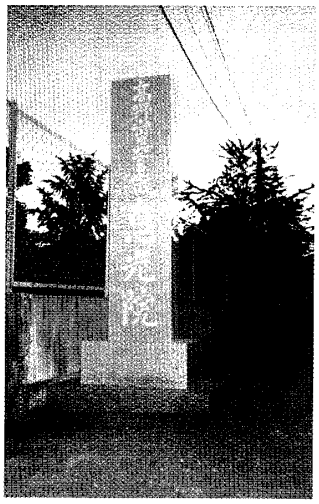

図2　箱崎宮
千利休が寄進したと伝えられる「灯籠」
(重要文化財)　社伝より
恵光院に納められている秀吉と利休の博多人形

名島・妙見島の茶会は，小早川隆景によって催された。九州陣後，筑前博多と肥前長崎は豊臣氏の直陣地とされたが，隆景は旧領伊予の替わりに筑前一国と筑後二郡，肥前二郡を秀吉から賞与され，名島に城を築いた。この時，島井宗室・神屋宗湛らは，資金援助をし，現場見舞として白練一樽・御肴一折・煮染などを進上している。そこで隆景も喜び，彼らを親しく城内に出入りさせ，また，茶会を催し，彼らを招待している。これが名島・妙見島の茶会である。

当時は磯伝いに干潮のときだけ渡ることのできたという妙見島は，現在では埋め立てられ，陸繋の島になっていた。また，「博多八景」の一つとして称賛された「名島の夕照」などの美景も今は見る影もなく，妙見島に建つマンションの敷地の片隅に「名跡地太閤秀吉公茶遊井戸跡」と書かれた石碑の立つ井戸をみつけた。秀吉は博多滞在の間に妙見島においても茶会を催したのであろう。この他にも粕屋郡新宮町や姪ノ浜の国道三号線沿いにも太閤水跡があった。

秀吉と宗室との交渉があらわれてきたのは，1587年(天正十五年)六月四日の事である。宗室は秀吉から拝謁を許され，肴一折り，鮮魚二頭・猩々緋一反を献上し，陪食を命ぜられている。そして兵火に懼って焼亡した博多の町の復興に当たることとなり，従前どおり表口三十間，奥行き三十間の屋敷を拝領し，町並み諸役を免許された。宗室はこれまでも博多の町年寄りとしてかなりの権力をもっていたが，これ以来，関白秀吉という権力者を背景として，新たな切望を得るに至った。

1587年(天正十五年)，南に島津勢を計って天下をとった太閤秀吉(当時は関白)が筥崎社頭に軍勢を休めた。出迎えて 博多復興を陳情する島井宗室，神屋宗湛らに秀吉は援助を約束し，焼け野が原に立って視察した。十数年にわたる戦火と，最後に火をかけて逃げた島津勢のため，博多は見渡す限りの廃墟となっていた。秀吉は即座に石田三成，小西行長ら五人の奉行のもとに下奉行三十人をおき，おおがかりな戦災都市復興に着手した。これが「太閤町割り(都市計画)」であった。秀吉は同時に自治都市とする大恩典を与えた。近世以降の発展の基礎は，この時固まったという。こうして完成した博多の街は，再び活気にあふれた。神社仏閣や豪商の屋敷は高い土塀を築き，それが連なって「博多八丁べい」と呼ばれたといわれている。宗室，宗湛も町割りの功論によって，それぞれ間口十三間の宅地を与えられた。以来二百八十余年，博多区呉服町に残る宗室家敷のそれは，風雪に崩れ昭和45年，櫛田神

社境内に移築復元された。博多べいは，石や瓦を横に並べて土に築きこんだもので，郷土再建の悲願を塗り込めた魂の記念碑として，一見の価値がある。

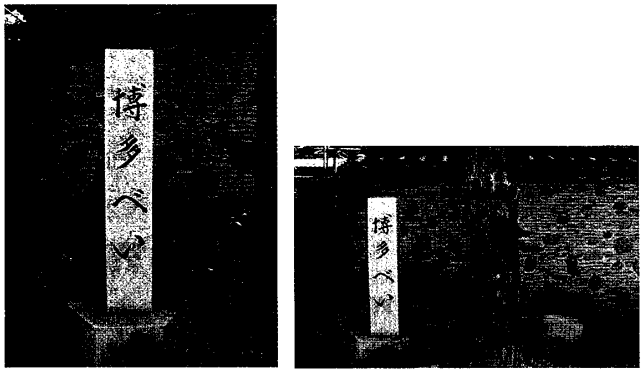

図3　博多ベイ
郷土再建の悲願を塗り込めた魂の記念碑

宗室は，1610年（慶長十五年）正月十五日付けで，自ら筆をとり，徳左衛門信吉に17ヵ条にわたる教訓条をしたためている。これは，島井家の子々孫々に伝えるべく商侶の模範を示したものであって，長く同家の家宝として伝えられた。第一条は，律儀・孝行・慇懃（いんぎん）の徳を説いたもので，対人関係の徳目を第一に挙げていることは，商人の教訓として極めて注目される。第二条は，信仰について述べたものであるが，自ら法体をとり，晩年は崇福寺の造営に力をつくした宗室も，子孫に対しては特に後生願いの無用であることを論じた。三，四，五条はいずれも四十歳以前の心得を説いたもので，壮年時代は商売を第一とし，信仰，趣味，娯楽などより優先することを明確にうたっている。尚，第四条で唐，南蛮など外国貿易への役資は「きらい事たるべく」とし，投機事業として危険の多かった外国貿易に対する慎重かつ細心の心構えを説いている。第七条は，交友に関する訓戒である。八条は，節倹を勧めたものである。第九条も前条に続いて節倹の道を説いたもので，特に買物や下人の使用について記している。第十条は，醸造，算取，使用人に関するもの。第十一条は，使用人の飯米，味噌，塩などの消費に関する心得を説いたもの。第十二，十三条は，商売の秘訣を説き，以下の各条は，時間の節約や旅行の心得，喧嘩，口論に干渉することのいましめなどから夫婦和合の重要性にまで及んでいる。ここに表示された人生観から推測される宗室の茶の湯というものは，実生活に即した，地味なものであったことが窺える。

十七条の教訓をしたためて，養嗣左衛門信吉の後事を託した後の宗室は，虚白院に隠退して閑日月を過ごしたが，1615年（元和元年）の八月二十四日，七十七歳をもって病死した。遺言に従い，遺骸を崇福寺の塔頭瑞雲庵に葬られている。

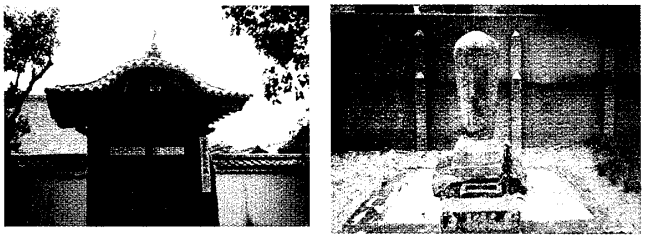

図4　崇福寺　島井宗室の墓

2)『神屋宗湛』

島井宗室と併称される博多の数奇者に，神屋宗湛がいる。宗湛は宗室と同時代の富商で，茶日記として名高い「宗湛日記」の筆者でもある。この日記は1586年（天正十四年）十一月，二度目の上洛の時から書き始められている。

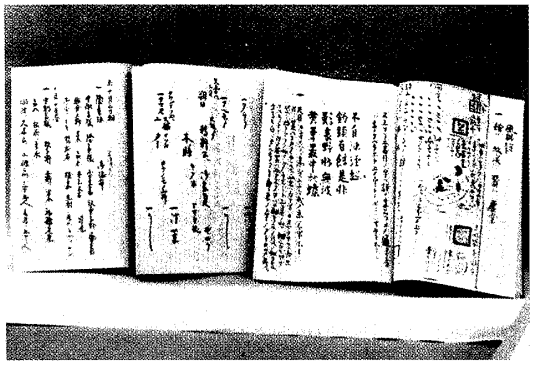

図5　「宗湛日記」神屋宗湛略伝より

神屋家の家譜によると，1553年（天文二十二年）正月元旦，紹策の子として生まれ，通称善四郎，名を貞清といい，幼少の頃から聡明であったといわれている。神屋家は代々博多の津に住み，古くから豪商であったといわれ，初代永富は，姓は菅原，宇佐八幡宮の管領職を務めていたというが定かではない。また，日明貿易に従事し，媽港（マカオ）に日本人町を建設したという二代目主計は1539年（天文八年）の遣明船（大内氏の経営，正使湖心碩鼎（こしんせきてい）［博多聖福寺］，副使策彦周良（さくげんしゅうりょう）［京都天龍寺］）の一号船の船頭であったといわれるように，主計が大内氏に結びつく貿易家であったことが窺える。三代目寿貞は，入明して製錬術を学び，帰朝後，日本に初めて銅や金を吹き分ける技術を広め，また，鉱山を開きその道の先達になった。さらに，寿貞は石見（いわみ）の銀山（ぎんざん）（石見銀山（いわみぎんざん）:2007年世界遺産登録）を発見し，銀鉱の採掘を計画した。1526年（大永六年）に着手し，鉱石を得て博多に輸送している。このようなことから，神屋は三代目寿貞の時に巨額の富を得，博多の商人として確固たる地盤を築いた。また，寿貞は明から

帰朝した際に，文淋（ぶんりん）の茶入れや瀟湘夜雨の絵の一軸を持ち帰った。文淋の茶入れは博多文淋と言われ，瀟湘夜雨は玉潤筆八景の一つで，ともに神屋家の家宝として伝えられた。

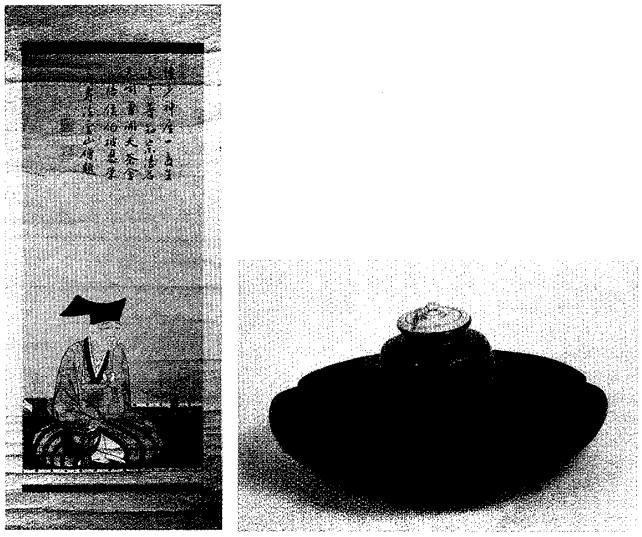

図6　神屋宗湛肖像と博多文淋　神屋宗湛略伝より

「宗湛由緒書」によれば，神屋宗湛は1582年（天正十年）五月に上洛し，宗室とともに本能寺の茶会に参席して，翌暁，明智光秀の反乱に会い，身をもって洛外にのがれたという。その際に，宗湛は床の間に掛けてあった遠浦帰帆（えんぽきはん）の名幅を持ち出したという。これは玉潤筆八景の一幅で，連歌師の柴屋軒（さいおくけん）宗長（1448~1532年）から今川義元に伝わったといわれる物であった。それから四年目の1586年（天正十四年）十一月十八日に再び上洛した。「宗湛日記」によると，同年十月十八日肥前の唐津を出発した宗湛は，筑前の冠（かぶり）村，摂津の兵庫の港に到着し，それから下京四条の森田浄因の家敷に着いて宿所にした。宗湛の以後四ヶ月におよぶ上方生活が始まる。

宗湛はこの上方での四ヶ月余，京，大阪，堺，奈良と当時の我が国の代表的な都市をまわり，多くの商人や茶人，また，秀吉以下の武将たちと交際した。宗湛が上方滞在中どのような人々と茶会を通じて交わったかを「宗湛日記」によると，①宗伝，②天王寺屋宗及，③天王寺屋道叱，④忙閑，⑤境本住坊，⑤新屋了心，⑤大和屋立佐，⑧天王寺屋宗凡，⑧喏庵，⑧草部屋道設というふうに，茶会を通じて交わった回数の多い順に並べられる。宗湛の上洛の目的からみても，これらの茶会が最も重要な交際の場であり，今後の宗湛や要人の立場と動向を考える上で多くの示唆を与えてくれる。同年二十日には，愛宕山に参詣し，二十三日には上京の津田宗及の宿におもむき，裏座敷で不時の振る舞いを受けた。宗及は堺の会合衆の長老であり，茶の湯者としても利休の先輩格である。宗湛はこの宗及の斡旋により豊臣秀吉に近づくことができたという。茶会などでは交わった回数からみれば，天王寺屋一族が三人もいる。これは宗湛が四ヶ月，天王寺屋一族と一体になって行動したことを示す。かつての島井宗室と同様，博多の二大豪商は天王寺屋との交わりによって中央へ乗り出している。博多の宗室，宗湛から日本の宗室，宗湛への飛躍は，天王寺を介して行われたということである。1586年（天正十四年）二月三日，宗湛は，紫野の大徳寺の総見院に参じ，古渓宗陳禅師について得度し，髪を剃って法体となり，善四郎貞清を改め，ここに宗湛と号した。外形的には頭を丸めたがその反面，茶を喫しつつ依然として俗世間に活躍した。得度が終わって，宗湛は京をたった。そして約一ヶ月，堺に滞在した。その間，大安寺に宿したらしい。大安寺は1394年（応永元年）草創の古刹で，この頃最盛の堺の中心的寺院で，堺における茶の湯の場所でもあった。塔頭塔頭塔頭虎蔵主のほか退蔵軒主，忙閑庵主など，茶事に堪能な僧が多く，宗湛とも茶の湯を楽しんだ。また，大安寺は博多衆とも縁が深く，宗伝は1582年（天正十年），大安寺の茶席を借りて茶会を催した。堺での一ヶ月は，宗湛には茶の湯修行の時期であったことが窺える。天正十五年正月二日，天王寺屋道叱の茶会に招かれていた神屋宗湛は，大阪の天王寺屋宗及より秀吉の謁見が明朝の茶会の席で行われるので早く来阪するようにと書状をもらった。宗湛は「虎皮二枚，大豹皮一枚，照布二端，沈香一斤」の進物を持って急いで堺をたった。明けて同年正月三日，大阪城内で秀吉主催の大茶会が催された。この大茶会は，上洛した宗湛を供応するために開かれた。城の門外で，津田宗及の紹介により初めて，千利休と会見した。しばらくして，秀吉に虎の皮の進物を差し上げ，対面があった。このあと，秀吉，堺衆五人と一緒になり，その時秀吉が出てきて「筑紫ノ坊主ハドレゾ」と声がかかる。筑紫の坊主とは，法体になった神屋宗湛のことであった。すぐに天王寺屋宗及が「是ニテ候」と答えた。秀吉は「ノコリノ者共ハノケテ，筑紫坊主一人ニ能ミセヨ」といった。堺衆はみな縁に出て，宗湛一人道具拝見にあずかった。

食膳の用意の間，宗湛らはつぎの広間で待ち合わせていたが，秀吉は「筑紫ノ坊主ニメシヲクワセヨ」という。宗湛は秀吉の前で大名衆と同席で食事をすることになった。給仕の衆が多くいたが，宗湛だけは三成が給仕を担当し，続いて茶がふるまわれた。「四十石，撫子，松花」の三名物茶壺の茶を挽かせたが，秀吉は「ソノツクシノ坊主ニハ四十石ノ茶ヲ，一服トツクリトノマセヨヤ」と命じ，宗湛は利休の

点前で一服頂戴した。

終わって名物茶入「新田肩衛」も宗湛一人拝見を許されたという。多くの大小名，堺衆が参じているのに，賓客とはいえ，まるで宗湛一人が主役であった。秀吉が九州出陣を前に，博多衆の懐柔のための宗湛に対する多大な配慮が窺える。この茶会の後秀吉は，九州の役の陣立てと出発を公表した。この茶会は出陣の茶会であり，宗湛が主役でなければならなかったのである。これにより，博多の宗湛から日本の宗湛へと大飛躍をとげる。

1587 年 (天正十五年) 正月十二日，「宗湛日記」によると宗湛は堺の千利休屋敷の朝会に招かれた。

この朝会で宗湛は亭主である千利休から直接に貴重な雑談を聞いたという。その内容は，「いったいに袋に入るものは茶入れだけである。『づん切り』なども入れてよい。これは茶をいためない。茶の養生のためだから，茶入れは袋に入れなければならぬが，その他のものはどんなものでも袋に入れてはならぬ。茶杓はむかし小壺の茶杓などといって，茶入れの大きさに似合わせてつくったが，今は折撓(おりだ)めでもすくう。茶入れの口にはいりさえすればよい。頭巾肩衛は，珠光が末期に門弟の宗珠に向かい，この茶入れには無上の物を入れないで，ただ揃いの物を入れよと言って死んだ。むかしは二貫文ほどの品にすぎなかった。珠光がこのように遺言したのは，この茶入れを卑下して言ったのである。この小壺茶入れを奈良屋又七という者が所持していたところが後に，その言い伝えを聞いて気に病み，それがもとで死んでしまったといわれている。

圜悟の墨跡は，元来，珠光が一休和尚からただでもらってきて，表装したのである。珠光は一休和尚の法弟だから，ただでもらった。それを今，この利休は千貫文で手に入れた。この小茄子の茶入れは名物の三茄子の一つで，外見が細めだから，この名がある。ほんとうに細いのではない。老茄子とは，老いる茄子のごとく黄色い薬があるからだ。内赤の盆とは，盆の内が赤いのをいう。赤は雑なる心，黒は古き心である」というように述べている。千利休の説明は平凡な話であったようだが，その中で奥深いものであり宗湛にとっては，大変勉強になったであろうことが窺える。

宗湛はその後，山岡対馬守 (1543~1604) が，正客であった大阪城山里丸の数奇屋における秀吉の朝会や堺・大阪・奈良の各所の茶事に招かれて，ひとまず博多に帰国したということである。

秀吉は 1587 年，全国統一作戦として九州遠征を三月朔日に決行した。総大将である秀吉は筑前・筑紫口から，舎弟の大和大納言秀長は豊後・日向口から進撃し，薩摩に入り，降伏させた。その帰途，十数日間博多の津に滞在し，本領安堵・新知宛行ない・国替え・改易などの戦後処理を講ずると同時に，耶蘇教を制禁し，又，博多の復興を行った。博多の町屋は兵火に焼かれて焦土と化していた。そこで秀吉は町の数寄衆を呼び出し，博多の町を建て直した。神屋宗湛，島井宗室も博多の町年寄の一人として大活躍した。

秀吉の本陣は箱崎八幡宮の社内にもうけられた。秀吉の帰陣にあわせて，宗湛も肥前唐津より参上した。間をとりもってくれたのは，やはり天王寺屋宋及であったという。翌十日，秀吉は博多視察のため八幡の社頭から「スフタ」という南蛮船に乗って博多へ向かった。スフタ船はバテレン・コエリヨの持ち船で，コエリヨは戦勝祝いの為，博多へきていた。

スフタ船の秀吉には，宗湛だけが伺候して着岸と同時に博多衆からの進物を差し出したところ，その中から形式的に銀子一枚だけをうけとり，あとは返したという。これは，秀吉の博多衆に対する心づかいであったのであろう。そして十二日からさっそく，町割り (太閤町割) が始まった。

秀吉は天王寺屋宗及の他，千利休，その子紹安らも同行させていた。博多衆に自らの権威と堺の茶の湯をみせるためであった。

秀吉の死後，京都・大阪・伏見そして九州にまで，雲行きがわるくなってきた。

1598 年 (慶長三年) 宗湛は上洛し，翌年伏見・大阪・堺のあいだを往復し，茶会を通じて商権の獲得に奔走したが，すでに秀吉を失った上方には，昔の夢は求めることができなかった。

1600 年 (慶長五年) 九月五日，関ヶ原の戦いの結果，徳川家康は黒田長政に筑前その他五十二万石を賞賜し，長政は小早川秀秋に代わり筑前の新国王となり，居城を福岡に築いた。神屋宗湛と島井宗室は共に長政の入国を祝し，築城にあたってもいろいろと世話をやいた。

その後の茶会は新国王の黒田長政とその父である如水(じょすい) (黒田孝高) を中心とするものであった。

1605 年 (慶長十年)，宗湛は伏見や大阪におもむき，古田織部 (1544~1615 年)，津田宗凡 (宗及の子) などの茶事に招かれたが，徳川氏の政権が確立するにつれて，士・農・工・商の身分制度を根幹とする武家封建社会が成立し，神屋宗湛や島井宗室は博多の町人として，領主の黒田氏の絶対絶命に服従せざるを得なくなり，自由な活動が出来なくなった。また，神屋家伝来の大名物として知られた博多文淋の茶入れを黒田家に強制的に献上させられることになった。この茶入れと引き換えに，宗湛は知行

五百石と黄金二千両を与えられた。

博多文淋を失って十年余の後，1635年(寛永十二年)十月二十八日，神屋宗湛は八十五歳の高齢をもって死没した。

宗湛が天正十五年・十六年頃，屋敷内に建てた茶室，湛浩庵は「宗湛茶室」と呼ばれ，三畳半という珍しい席で，明治初期売却され，転々と人の手に渡り，明治二十九年平岡浩太郎氏が買い受け，現在富士ビルとなっている天神町の自宅へ移建，修復された。移転後，「吹毛庵」と改名されたが，後に「湛浩庵」と改められ，昭和十一年国宝に指定されたが，昭和二十年六月十九日の空襲で焼失した。昭和三十八年博多区千代町崇福寺に復元されたものが「湛浩庵」として現存している。現在，門前には拝観謝絶の札が下げられ，それを見ることはできなかった。

宗湛屋敷跡に近い駐車場の片隅に，大同庵跡がり，その説明板があった。

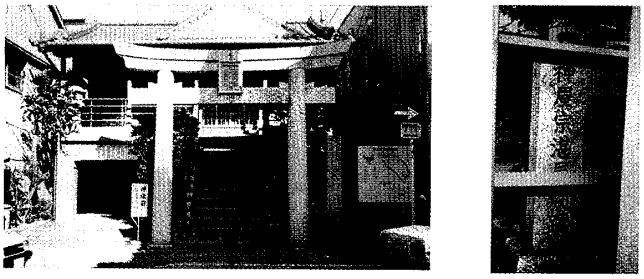

図7　豊国神社　神屋宗湛屋敷跡

古渓は，宗湛の戒師で宗湛を剃髪得度させ，彼に宗湛という法号を与えた人物である。古渓は，桃山時代，京都における臨済禅家の第一人者であり，千利休との交際も深かった。1588年(天正十六年)紫野の創設した天正寺問題で秀吉の怒りにふれ，九月筑前博多に配流の身となった。

大同庵は後に廃庵となるが，宝暦の初め，1751年報光寺内の旧趾に大同庵を再建して，大同庵の額をかけて戦前まで残っていたが，戦災で焼失した。

大同庵跡から100mほど離れた所に建っている観音ビルのあたりが，古渓和尚謫居の跡であり，ビルの二階に観音寺があり，階段のおどり場に小さな古渓の頂相が祀ってあった。

図8　大同庵跡　古渓像

そして，福岡市博多区の御供所妙楽寺内に，神屋宗湛の墓があった。

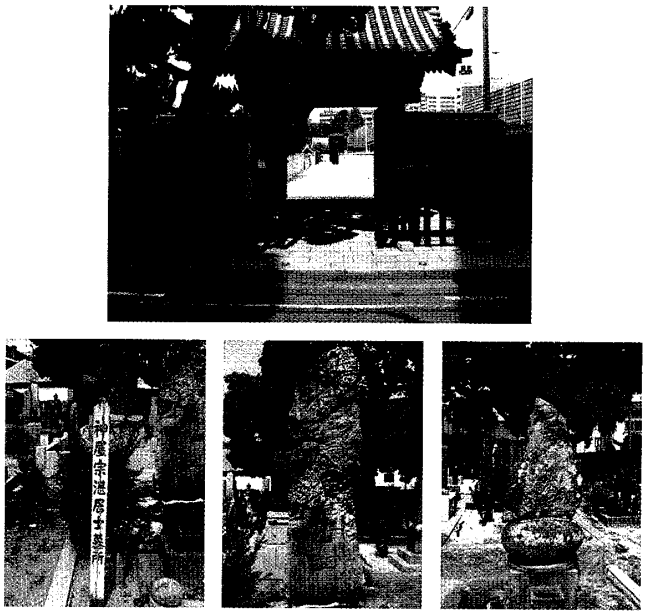

図9　妙楽寺　妙楽寺山門と神屋宗湛の墓

3. まとめ

栄西以後の十二～十七世紀は，茶の用途が薬用よりも趣味嗜好の分野へ発展し，茶園も全国津々浦々に広がり，茶道の発達と共に大発展を遂げた。しかし，十八世紀の前半までの飲茶はほとんど抹茶方式であり，それ以後煎茶の流行をみて，急速に大衆茶の発達が促され，今日に至っている。

今回の研究で，博多と茶道とが歴史的に深い関わりを持っていたことがわかり，茶や茶道と深い関係を持った博多の豪商，神屋宗湛，島井宗室らは，堅実な人生観と世界観を持ち，その時代の中で新しい何かを見出し，次の世代に伝えていかなければならないという義務感さえ窺える茶人達であった。現代

の我々に求められている人生観や世界観を見出す何かを与えられたような気がする。

また，紹介することはできなかったが，「宗湛茶湯日記」を通してその時代 (室町末期) の博多の食文化を垣間見ることができた。

「伝統とは古いものではなく，昔からのものを今に伝えるものとして，その時代に応じてわかりやすく伝えられて来たものであり，伝えていくものである。」とあるように，伝統的文化が失われつつある今，お茶には欠かせない茶うけや和菓子等においても茶の効能と共に食育を通して残していきたい。

文献

1) 前田昭子ら : 抹茶の起泡性におよぼす NaCl,CaCl2,MgCl2, 脂質の影響 , 日本家政学会誌 ,49,633-636(1998)
2) 島田和子 : 緑茶浸出液中の茶葉サポニンと水溶性ペクチンの分析 , 日本家政学会誌 ,54,957-962(2003)
3) 杉澤彩子ら :X 線照射により誘発した染色体損傷に対する茶カテキンの抑制効果 , 日本栄養・食糧学会誌 ,56,85-90(2003)
4) 曽我部夏子ら : 抹茶が小腸アルカリフォスファターゼ活性に及ぼす影響について , 日本家政学会誌 ,57,215-220(2006)
5) 筑紫 豊 : 博多と茶湯 , 文献出版
6) 桑田忠親編 : 茶道辞典
7) 桑田 忠親 : 日本茶道史 , 河原書店
8) 井口海仙ら : 茶道辞典 再販 , 淡交社
9) 木下桂風 : 喫茶史談
10) 林屋辰三郎ら : 日本の茶書 1, 平凡社
11) 多賀宗隼 : 栄西
12) 栄西 , 楢林忠男訳注 : 喫茶養生記
13) 村井康彦 : 茶の湯人物史
14) 若原英一共著 : 茶道文化選書 日本の茶―歴史と文化―, 淡交社
15) 邦光史郎 :「豪商家訓名言集」, 講談社出版研究所
16) 武野要子 : 神屋宗湛 , 西日本新聞社 西日本人物誌編集委員会
17) 武野要子 : 博多の豪商 , 葦書房
18) 井伏鱒二 : 神屋宗湛の残した日記
19) 田中健夫 : 島井宗室
20) ルイス・フロイス著 , 柳谷武夫訳 : 日本史